

写真に見る

1115年前の長崎

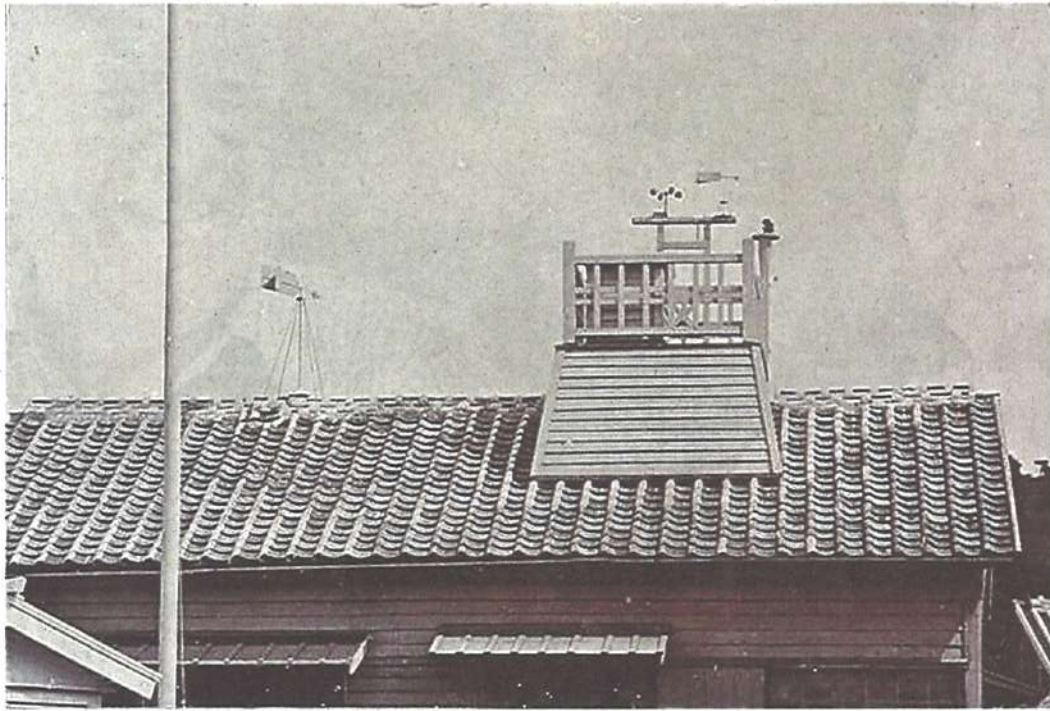
日露戦争時代

姫野 順一

□ 23 □

近代的気象観測の草分け

西洋に窓を開けた長崎は近代的な気象観測の草分けであった。晴雨計(气压計)や寒暖計を用いた気象観測は、ブロンホフやシーボルトにより文政年間(1820年代)に出島で始まった。19世紀に長崎に来航したオランダ船は気象観測機器を備え、長崎近海で測量した。その記録はオランダに残



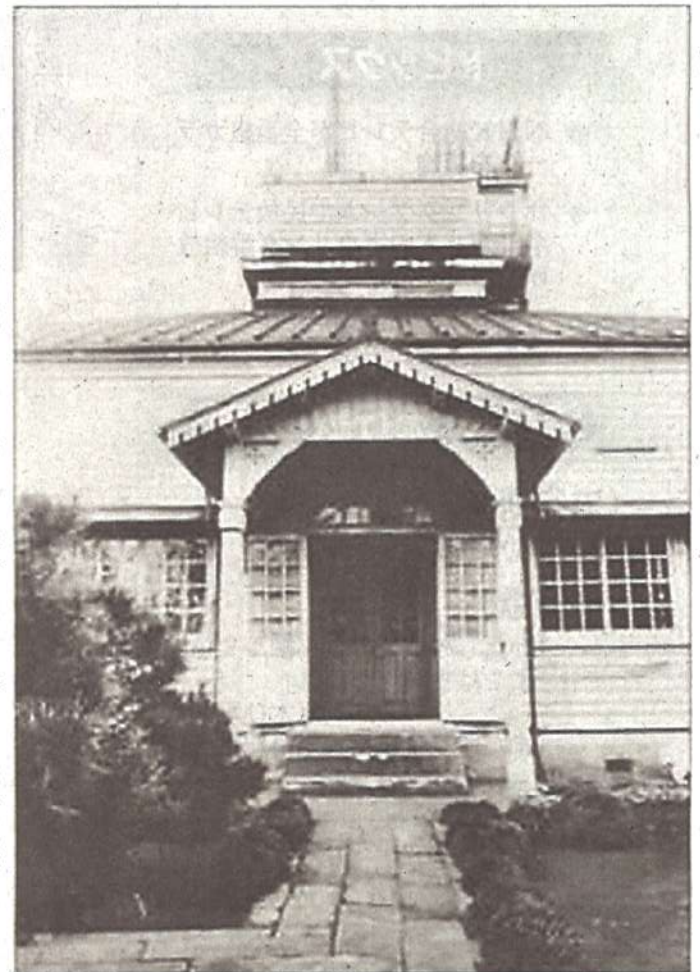
①明治30年ごろ撮影された長崎測候所(長崎外国語大所蔵)

の気象測量場の設立を決めた。翌11年7月1日、下長崎村十善寺郷361番地(現マリア会海星修道院前、海拔57・6m)に函館、東京、札幌に続く日本で四番目の気象観測所「長崎測候所」が創設された。

写真①は、明治30(1897)年ごろ撮影され

た長崎測候所の写真である。長崎外国語大が所蔵する庄田平五郎旧蔵アルバムに収められていたうちの1枚で、この地にあった当時の測候所の写真としては初めて見つかったものである。屋根には風力計と風信器(風向計)、日照計(右端)が見える。屋内には晴雨計、屋外の百葉箱には寒暖計、地面には雨量計を備えていた。

毎日3回気象観測を実施し、電信で内務省地理局測量課に報告した。明治20(1887)年に長崎県に移管され、26年からは天気予報を始めている。



②「ドン山」に建てられた長崎測候所(明治31年撮影、「長崎海洋气象台100年のあゆみ」昭和53年より)

初代の所長格は、内務省地理局測量課気象掛主任の正戸豹之助。その後、も中央から竹林貞一郎、大塚信豊と続く。彼らはお雇い外国人のイギリス人測量技師ジョイネルから指導を受けていた。「測候所」の名称は正戸が長崎で初めて用いた。

ちなみに長崎市は当時、時鐘と時旗で正午を市民に知らせていたが、

不正確だった。市の依頼で測候所は長崎郵便電信局に電信線をつなぎ、東京天文台から正午の時報を電波で受け取るようになった。写真①左に見えるような掲揚柱を測候所構内に設け、明治28(1895)年7月1日から毎日、信号旗を掲げて正午を長崎市役所に伝えるようになった。

その後、測候所は近くの海星学校の校舎新築により観測が困難となったため、明治31(1898)年8月、元町の風取山、海拔130mの地に移転す

る。写真②はその時撮影されたものである。36年からは長崎測候所の合図で大砲を打ち、長崎市民に正午を報じるようになったため、ここは「ドン山」と呼ばれるようになった。ドンは太平洋戦争勃発後の昭和16(1941)年12月に廃止された。

(長崎外国語大学長)

この企画の過去の記事、写真は長崎外国語大のホームページ(<http://www.nagasaki-saigo.ac.jp/rechnas/newspaper/>)で見ることができます。



長崎外国語大のホームページにアクセスできるQRコード

随時掲載します